

一、概況

本節に於ては昭和三年乃至昭和十二年十ヶ年間に於ける法定傳染病發生の動向に就て記述せんとす。本縣下法定傳染病發生數に就て見るに昭和六年に於ける一、三〇三名を最低とし爾後累年増加し昭和十一年に於ては二、〇九四名の發生を見たるも昭和十二年に於ては稍減退し一、八二八名となれり。(第一表参照)之を本縣人口との萬對比に就て見るに昭和六年一一・三三二を最低とし昭和十年一九・六六を最高とす。次に之を各病類別に見るに腸「チフス」は人口萬對比最低昭和六年六・四七最高昭和十年二・〇一にして(第六表参照)本縣傳染病の過半数を占め、赤痢は人口萬對比最低昭和五年二・一五最高昭和十二年四・三六にして兩者を合する時は各年患者總數の約八割に達す。

之を要するに現下の各病多發現象を大勢的に觀れば従前病症輕微或は隱蔽の爲めに放置され居たる程度のものも衛生思想の向上、救療設備の改善に伴ひ届出の促進したることを證するものにして救治の進歩と共に死亡率の低下を見つゝあることは(第三表参照)之が證左にして現行防疫施設の効果に歸せざるべからずと雖尙幾多改善施設を要するものあるは言を俟たざるなり。

第一表 最近十ヶ年間各種傳染病發生數

年次	病名	ベスト	コレラ	赤痢	腸チフス	チフス	痘瘡	發疹チフス	猩紅熱	デリア	流行性脳脊膜炎	計	本縣人口萬對比
昭和三年				三九	一〇四	四						一六八	一四・〇〇
昭和四年				三〇	八七	二						一二四	一〇・三三
昭和五年				三六	七四	一七						一〇一	八・四七
昭和六年				三〇	七五	三						一〇三	八・七三

年次	病名	赤痢	腸チフス	チフス	痘瘡	發疹チフス	猩紅熱	デリア	流行性脳脊膜炎	計	本縣人口萬對比		
七年				二五	八〇	三				一〇	一三	一一・七	
八年				三三	一一〇	四				三	一三	一一・三	
九年				四七	一二一	四				七	一七	一四・六	
十年				四六	一〇〇	四				一	一五	一三・三	
十一年				元〇	一三〇	六				三	二〇	一七・五	
十二年				五三	九三	一〇				七	二六	二一・九	
計				三、五九	一〇、三七	三六				二〇	一、五三	一四・八	
總百分數				二〇・八	五九・四〇	一・八六				二・九〇	〇・〇六		
全十ヶ年平均				二八・〇	五九・三〇	一・〇九				四・〇五	〇・〇五		
昭和十二年													

赤痢中に疑似症及疫痢を含む
腸「チフス」中に疑似症を含む

第二表 最近十ヶ年間各種傳染病死亡者數

年次	病名	赤痢	腸チフス	チフス	痘瘡	發疹チフス	猩紅熱	デリア	流行性脳脊膜炎	計
昭和三年		一五	六							二一
昭和四年		一五	一五							三〇
昭和五年		一七	二六							四三

總百分 數分 對比	年							
	計	十二年	十一年	十年	九年	八年	七年	六年
前十年平均	四・九〇	一・六四四	一・五〇	一・〇〇	一・九七	一・四一	一・四四	一・五五
昭和十二年	五・六二	一・六四四	一・三三	二・〇〇	一・五六	一・〇〇	一・四一	一・四四
		三・五	三	二	二	一	六	四
		九			四	四		
		一					一	
		一			一	五	一	三
		五九七	七〇	八三	五九	七六	六〇	四〇
		五						
		三・九七一	四・二	四・〇	四・七	四・一	三・七	三・四

赤痢中に疑似症及疫痢を含む
腸チフス中に疑似症を含む

第三表 最近十ヶ年間各種傳染病患者對死亡率

年次	病名	赤痢		腸チフス		バラチフス		痘瘡		發疹チフス		猩紅熱		デフテリア		流行性 腦脊髄膜炎	
		本縣	全國	本縣	全國	本縣	全國	本縣	全國	本縣	全國	本縣	全國	本縣	全國	本縣	全國
昭和三年		四六・三	四・四	一六・二五	一九・四九	三・六	九・八	二〇・〇	一五・二	四・五	—	三・九	三・三	三・三	四・〇	四・〇	三・〇
昭和四年		四七・七	四・七	一九・七	二〇・九	三・五	九・六	—	一〇・五	六・七	七・九	四・三	三・三	三・三	三・九	四・〇	三・七

年次	赤痢	腸チフス	バラチフス	痘瘡	發疹チフス	猩紅熱	デフテリア	流行性 腦脊髄膜炎	計
五年	四・六九	一四・八六	一七・六四	八・六一	二・七	—	—	—	三六・六
六年	四・五三	一九・二九	一五・三六	八・三	四・三	—	—	—	三〇・八
七年	四・七三	一七・五	七・二四	八・二	四・七	—	—	—	二八・七
八年	四・七	一四・〇	二・二四	六・七	一四・九	—	—	—	二六・三
九年	四・〇七	一三・五	二・五〇	七・五	一・二	—	—	—	二〇・七
十年	四・八	一五・〇	四・八三	六・四	一・五	—	—	—	二二・〇
十一年	五・〇〇	一六・八	七・二四	六・四	一・六	—	—	—	二二・九
十二年	四・〇	一六・九	一五・〇	六・七	一・五	—	—	—	二二・六
十ヶ年間平均	四・二五	一六・二八	一七・〇七	七・六	一・五	—	—	—	二二・六

第四表 最近十ヶ年間各種傳染病發生月別表

月別	病名										計	
	コレラ	赤痢	腸チフス	チフス	痘瘡	發疹チフス	猩紅熱	デフテリア	流行性 腦脊髄膜炎	計		
一月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
三月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
四月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
五月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
六月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
七月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
八月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
九月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
十月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
十一月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
十二月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
十ヶ年間平均	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

八	九	十	十	十	計
月	月	月	月	月	月
八七	六八	四九	三三	一七	三、五二
一、六八	一、四八	一、〇二	八八	八〇	一〇、三七
六	四	三	二	一	三六
三	二	一	一	一	二五
二、六七	二、三六	一、八七	一、二六	一、二八	二、三三
二、六七	二、三六	一、八七	一、二六	一、二八	二、三三
二、六七	二、三六	一、八七	一、二六	一、二八	二、三三
二、六七	二、三六	一、八七	一、二六	一、二八	二、三三
二、六七	二、三六	一、八七	一、二六	一、二八	二、三三

第五表 最近十ヶ年間法定傳染病發生郡市別表

郡市別	病名										計	患死百分率
	赤痢	腸チフス	チフス	猩紅熱	デリア	流行性脳脊髄膜炎	麻疹	痘瘡	計	患死百分率		
松山市	二九	一、六一	三三	六〇	九〇	二	一	一	一、六六	三、六〇	三、六〇	
今治市	二四	七九	四〇	三七	一六	一	一	一	一、三九	一、九〇	一、九〇	
宇和島市	三六	三三	一〇	四	七	一	一	一	一、二一	二、四〇	二、四〇	
八幡濱市	三	二七	一	一	九	一	一	一	一、七	二、三〇	二、三〇	
新居濱市	六	六	一	一	八	一	一	一	一、五	八、五九	八、五九	
温泉郡	六	一、五三	一	一	一〇	一	一	一	二、一〇	二、五九	二、五九	
越智郡	三	八九	一	一	一	一	一	一	一、三	三、三九	三、三九	
周桑郡	三	四三	一	一	一	一	一	一	一、五	一、八〇	一、八〇	
新居郡	三	三三	一	一	一	一	一	一	一、五	一、九〇	一、九〇	
宇摩郡	一〇	三三	一	一	一	一	一	一	一、五	一、九〇	一、九〇	

郡市別	病名										計	患死百分率
	赤痢	腸チフス	チフス	猩紅熱	デリア	流行性脳脊髄膜炎	麻疹	痘瘡	計	患死百分率		
上浮穴郡	一六	二二	一	二	七	一	一	一	二六	四三	二六、四九	
伊豫郡	一九	四四	一	一	六	一	一	一	二六	七九	三〇、九	
喜多郡	三	五九	一	一	一	一	一	一	一、〇	一、〇	三三、五九	
西宇和郡	三	一、二五	一	一	一	一	一	一	一、七	一、七	一九、一	
東宇和郡	二	二七	一	一	一	一	一	一	一、五	一、五	二六、一	
北宇和郡	二	七三	一	一	一	一	一	一	一、〇	一、〇	三三、七	
南宇和郡	四	一三	一	一	一	一	一	一	一、五	一、五	二七、九	
計	三、五二	一〇、三七	三六	五〇	二、五三	二	一	一	一、七	二、三三	二、三三	

備考 八幡濱市は昭和十年二月、新居濱市は昭和十二年十二月市制實施後の患者数を掲載す。

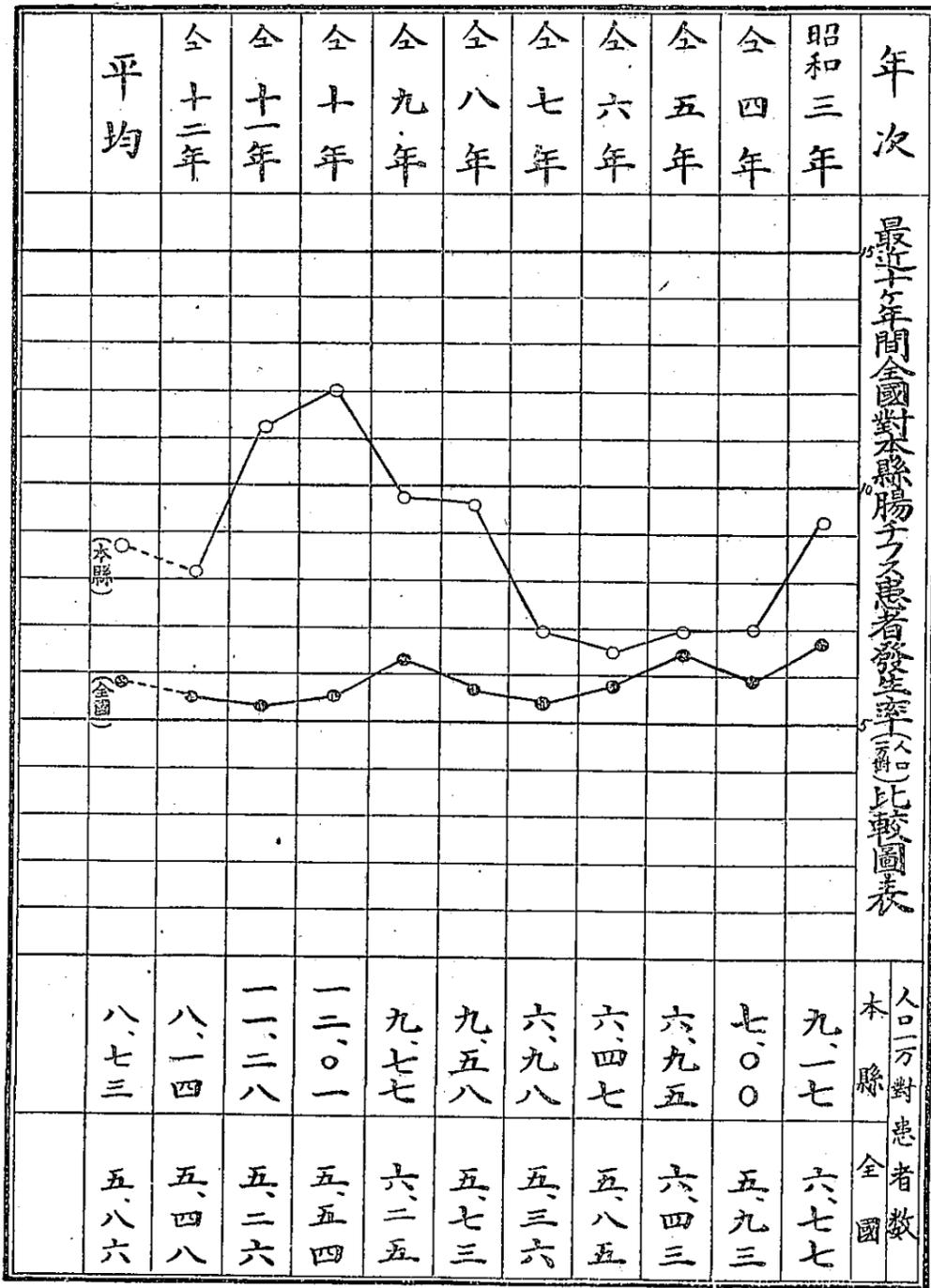
二、腸「チフス」

(イ) 腸チフス患者累年比較

最近十ヶ年間に於ける患者發生の消長を観るに、昭和三年以降昭和六年に至る四ヶ年間は漸次減少を示したるも昭和八年以降急激なる増加を示し昭和十年遂に其數一、四〇〇人口萬對比二二・〇一全國に於ける第四位の高率を見たるが昭和十一年一、三二〇人口萬對比一一・二八昭和十二年九五六人口萬對比八・一四となり低下の傾向にあり。

以上の發生率を全國平均と比較するに各年共に高位にして特に昭和十年及昭和十一年に於ては全國平均の二倍強の發生率に當る、而して之を十ヶ年平均に於て觀れば全國平均五・八六に對し本縣平均八・七三の發生率となる。(次表参照)

表 六 第



(ロ) 腸「チフス」死亡率

本病死亡率を觀るに人口萬對比に於ては昭和五年一・〇三を最低とし昭和十一年一・八四を最高とす。十ヶ年間に於ける全國平均一・〇九に對し本縣は一・四一にして稍高率にあるも之を患者對死亡百分比に就て觀れば最低昭和九年一三・五五最高昭和六年一九・一九にして十ヶ年間全國死亡率平均一八・五八に對し本縣平均一六・二八にして低率にあり。(第三表參照)

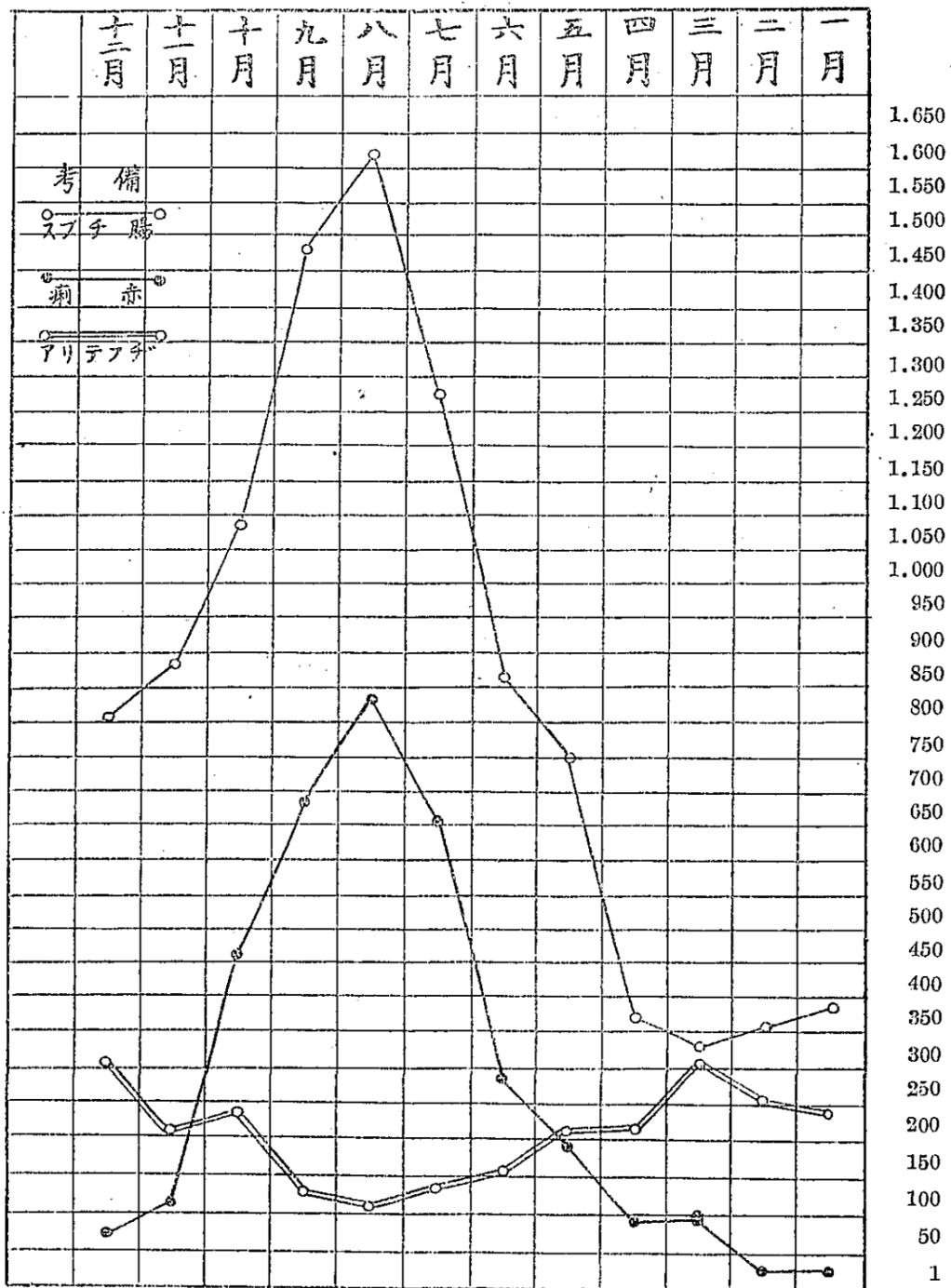
(ハ) 郡市別發生狀況

地方別に依る發生狀況に就ては温泉郡、西宇和郡最高にして五市に就て觀る時は松山市を最高とするも人口對比發生率より觀る時は松山以東所謂東豫方面及中豫方面鐵道沿線市町村即ち一般に交通頻繁なる地方に發生率高し。(七表參照)

第七表 最近十ヶ年間腸チフス患者郡市別發生數

郡市別	年 別										平均	
	昭和三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年	患者數	人口一萬對患者數
松山市	二一〇	一三三	一〇三	一〇九	一、二六一	一三・六						
今治市	七	四	四	七	七	七	七	七	七	七	七九	一四・四
宇和島市	六	四	三	四	五	五	五	五	五	五	六三	一三・〇三
八幡濱市	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二七	一三・八六
新居濱市	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六	一一・九
温泉郡	二二	一三	九	一〇	一、五三三	一〇・五						
越智郡	五	六	六	六	六	六	六	六	六	六	八九五	七・五

表八第 自昭和三年十月間本縣 陽子、スフテ、赤痢、發生月別表



一〇九

(二) 月別發生狀況

備考 本表に使用せる郡市人口は昭和十年國勢調査人口に依る。

最近十ヶ年間に於ける患者發生數は一ヶ月平均八十五名にして之を各月別に觀るに八月最高にして發生總數の一四・六七%
 九月一三・四二%、七月一一・五五%の順位にして右三ヶ月間に於ける發生數は總數の三九・六四%に當り發生數の少きは一月
 三・五三%、四月三・三五%、二月三・二八%、三月三・〇三%にして本縣に於ける腸「チフス」發生は五月より急激に増加し八
 月を最高とし九月より漸次減少し居る状態なり。(第四表及第七、八表参照)

郡	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
周 桑 郡	13	15	12	10	11	13	14	16	15	14	13	12	133
新 居 郡	21	23	20	18	19	21	22	24	23	22	21	20	215
宇 摩 郡	27	29	26	24	25	27	28	30	29	28	27	26	277
上 浮 穴 郡	34	36	33	31	32	34	35	37	36	35	34	33	348
伊 豫 郡	42	44	41	39	40	42	43	45	44	43	42	41	420
喜 多 郡	48	50	47	45	46	48	49	51	50	49	48	47	489
西 宇 和 郡	53	55	52	50	51	53	54	56	55	54	53	52	537
東 宇 和 郡	61	63	60	58	59	61	62	64	63	62	61	60	618
北 宇 和 郡	67	69	66	64	65	67	68	70	69	68	67	66	677
南 宇 和 郡	75	77	74	72	73	75	76	78	77	76	75	74	755
計	310	320	295	275	285	310	320	340	330	320	310	300	3100

一〇八

(ホ) 患者年齢別

本縣に於ける腸「チフス」患者年齢別を観るに六歳乃至二十五歳のもの最も多く總數の五二・六二%を占め年齢の高昇するに従ひ階段狀に減少す。(第九表参照)

第九表 最近十ケ年間腸「チフス」患者年齢別表

年齢別	年 別										平均	
	昭和三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年		人員
一—五	四九	三三	三三	三三	三三	四〇	五〇	五五	五五	三三	三三	三・八五
六—一〇	一〇〇	一〇〇	八三	六六	八〇	一〇七	一〇〇	一〇〇	一〇七	一〇七	一〇七	二・一五
一一—一五	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一・四三
一六—二〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一・四三
二一—二五	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一・四三
二六—三〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一・四三
三一—三五	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一・四三
三六—四〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一・四三
四一—四五	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一・四三
四六—五〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一・四三
五一—五五	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一・四三
五六—六〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一・四三

六一—六五	五九	二四	一五	一八	一五	一七	三三	一八	一・七五
六六—七〇	七〇	二七	一九	二二	二二	二二	二二	一九	〇・八九
七〇以上	七〇	二七	一九	二二	二二	二二	二二	一九	〇・八九

備考 年齢は數へ年に依る。

二、男女別

昭和十一年 男六八八……五二・二% 女六三三……四七・八八%
 昭和十二年 男四八二……五〇・四二% 女四七六……四九・五八%

(ハ) 患者診定期間

發病より診定に至る期間即腸「チフス」の病名未決定の儘經過する期間に就ては可及的短期間なるを望む所にして最近五ケ年間に於ける狀況を観るに平均發病後九日間に決定收容す。

(ト) 患者發病—治癒期間 並に 發病—死亡期間

昭和八年乃至昭和十二年に於ける本縣内腸チフス及同疑似症の經過日數に就き之を比較するに左表の如くにして殆其差異を認めず疑似症として届出たる患者も亦畢竟本症と異なる處なきものと認めらる。仍て昭和十三年十一月二十九日傳染病豫防法施行細則を改正し本病疑似症に對する法律適用を廢止せり。(第九表及十表参照)

第十表 自昭和八年 至全 拾二年 五ケ年間本縣發生腸「チフス」及同疑似症の經過比較

腸チフス	全治者總數	平均日數		死亡率	死亡者總數	死亡平均日數	
		自發病至全治	自届出至全治			自發病至死亡	自届出至死亡
三、九五八	四九・二	三九・三七	二〇・〇三	七九三	二八・二四	一六・五〇	

腸チフス疑似症	九三九	四八〇	三九〇	一九五九	一八四	二五二〇	一六・四
---------	-----	-----	-----	------	-----	------	------

第十一表 自昭和八年 至昭和十二年 五ヶ年間に於ける腸「チフス」及同疑似症経過表

期間別	経過種別			
	腸チフス		腸チフス疑似症	
	自全治	自發病 至死亡	自全治	自發病 至死亡
五日以内	一	五	三	四
一〇日以内	三	三九	一五七	三三
一五日以内	五	一一七	一四四	三三
二〇日以内	六	一一八	四三	三〇
二五日以内	一一三	一一二	九〇	二九
三〇日以内	一一一	九四	六三	一四
三五日以内	三二二	七四	五九八	一〇
四〇日以内	五五二	六四	六八七	八
四五日以内	六二八	七〇	五八一	五
五〇日以内	六六二	二五	四〇四	二
五五日以内	五五六	二六	二六〇	一
六〇日以内	三八一	一三	一六一	一
六五日以内	二四一	九	九四	一

期間別	経過種別			
	腸チフス		腸チフス疑似症	
	自全治	自發病 至死亡	自全治	自發病 至死亡
七日以内	二〇五	八	六二	七
七五日以内	九〇	七	三三	四
八〇日以内	六八	二	一七	二
八五日以内	三〇	一	一三	一
九〇日以内	二四	一	六	一
九五日以内	一九	一	七	一
一〇〇日以内	一四	一	二	一
一〇五日以内	五	一	四	一
一〇日以内	六	一	三	一
一一〇日以内	三	一	二	一
一二〇日以内	一〇	一	五	一
一二二日以上	三、九五八	七九三	三、九五八	七九三
合計	九三九	四八〇	三九〇	一九五九

三、赤痢(含疫痢)

(イ) 赤痢患者累年比較

赤痢は本縣傳染病中腸「チフス」に亞ぐ發生數を示せるも其實數遙に少なく最近十ヶ年間に於て一ヶ年平均患者(含疫痢)三五九名(内死亡一六六名)にして法定傳染病發生總數の二〇・八%を占む。之れが累年發生の消長を觀るに殆大差なく昭和十二年五二二名を最高とし昭和八年二五一名を最低とす、此の間の發生率を全國平均發生率に對比するに人口万對比に於ては全國平均四・九三に對し本縣平均二・五四にして全國平均より遙に少く、死亡率に於ては全國平均一・九八に對し本縣一・三八

なり。之を要するに本縣に於ける赤痢發生の狀況は全國的に觀る時は多發の地方に非ざるも患者對死亡百分率は四七・一九%となり全國平均三六・五七に比し相當高率にあり。(第一、二、三表參照)

第十二表 最近十ヶ年間赤痢(含疫痢)患者人口對比

年次	人口	患者數	死亡數	人口一萬對比	
				患者數	死亡數
昭和三年	一、一七、七〇〇	三三	一	一・一	一・〇
" 四年	一、一八、五〇〇	三〇	一	一・一	一・〇
" 五年	一、一四、三三三	三七	一	一・一	一・〇
" 六年	一、一五、〇〇〇	三〇	一	一・一	一・〇
" 七年	一、一六、〇〇〇	二五	一	一・一	一・〇
" 八年	一、一六、二〇〇	二五	一	一・一	一・〇
" 九年	一、一六、五〇〇	四七	一	一・一	一・〇
" 十年	一、一六、八六六	四六	一	一・一	一・〇
" 十一年	一、一六、七〇〇	三六	一	一・一	一・〇
" 十二年	一、一四、四〇〇	五三	三	一・一	一・〇

備考 本表人口は昭和五年及昭和十年、國勢調査 其の他は各年推計現住人口を示す

第十三表 最近十ヶ年間赤痢及疫痢患者對死亡率表

年別	種別		縣		全國	
	患者數	死亡者數	(含疫痢)	疫痢	(含疫痢)	疫痢
昭和三年	三三	一	四・七	七・三	四・七	六・三
" 四年	三〇	一	四・六	七・三	四・六	六・三
" 五年	二五	一	四・九	七・三	四・九	六・三
" 六年	二五	一	四・五	七・三	四・五	六・三
" 七年	二七	一	四・七	七・三	四・七	六・三
" 八年	二五	一	四・七	七・三	四・七	六・三
" 九年	四七	一	四・三	七・三	四・三	六・三
" 十年	四六	一	四・三	七・三	四・三	六・三
" 十一年	三六	一	四・六	七・三	四・六	六・三
" 十二年	五三	三	四・七	七・三	四・七	六・三
平均	三三	一	四・六	七・三	四・六	六・三

○印疫痢再掲
(F) 月別發生狀況

季節的には七月より十月に至る夏秋季に多く總數の七三・六三%を占め、市制地に於ては宇和島市最も多く松山市之に亞ぎ郡別に於ては温泉郡、新居郡、西宇和郡、喜多郡の順にして南宇和郡最も少し(第五表参照)。

(ハ) 疫 痢

疫痢のみに就て觀るに昭和八年以降、五ヶ年間に於ける患者總數一、〇八二死亡總數七五七にして死亡百分率六九・九六%に當り之を全年間に於ける全國平均五二・三六%に比し高率なり。患者年齢に就て觀るに四歳最も多い、五歳、三歳、六歳の順にして三歳乃至六歳のもの總數の八一・二三%を占む。性別に觀る時は男四六・五%女五三・五%にして女子の罹患率僅に高し。(第十四、十五、十六表参照)

第十四表 自昭和八年至十二年 五ヶ年間赤痢(含疫痢)患死狀況

郡市名	患者				五ヶ年平均	死者				五ヶ年平均
	八年	九年	十年	十二年		八年	九年	十年	十二年	
八幡濱市	11	11	92	56	78	11	77	55	44	55
宇和島市	35	30	37	23	32	66	93	91	77	56
今治市	57	93	88	59	80	23	33	16	90	45
松山市	65	36	63	69	56	45	55	99	89	55

郡市名	患者				五ヶ年平均	死者				五ヶ年平均
	八年	九年	十年	十二年		八年	九年	十年	十二年	
温泉郡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
越智郡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
周桑郡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
新居郡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
宇摩郡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
上浮穴郡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
伊豫郡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
喜多郡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
西宇和郡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東宇和郡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
北宇和郡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
南宇和郡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	130	135	136	133	133	135	136	133	133	133

疫痢は○印を附して再掲

第十五表 最近五ヶ年間疫痢患者年齢別

性別	年齢別											昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	合計	總數ニ對スル 百分比													
	計	十一才以上	十才	九才	八才	七才	六才	五才	四才	三才	二才								一才												
女	一六九	二	二	二	三	七	一九	三七	五三	三四	八	二	七九	一〇二	二二五	三	一	四	六	一五	二二	二三八	六	三	四	六	〇	二七	五六	三八	二〇〇
男	二二五	三	一	四	六	一五	二二	五〇	五七	四〇	一五	二	一二〇	二一八	二三八	六	三	四	六	一〇	二七	二二	二八	三	一	二	二八	五五	五二二	四八・二四	
合計	三九四	五	三	六	九	二二	四七	一〇三	一一〇	七四	二三	四	一九九	四四〇	五五三	九	四	一〇	一二	二五	四四	四四	六一	五	三	一二	五五	一〇八二	一〇〇〇	五一・七六	

第十六表 最近五ヶ年間疫痢死亡者年齢別

性別	年齢別											昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	合計	總數ニ對スル 百分比																							
	計	十一才以上	十才	九才	八才	七才	六才	五才	四才	三才	二才								一才																						
女	一三	一	二	一	三	四	一七	二九	四〇	二五	七	二	六二	七〇	一五一	一	一	四	一〇	一六	三三	四四	三〇	一〇	一	八六	七三	一五九	四	二	二	三	五	一九	四一	四七	二六	九	一		
男	二二	一	一	一	一	四	一〇	一六	三三	四四	三〇	一〇	七一	七二	一五	一	一	一	二	二	三	五	一九	四一	四七	二六	九	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
合計	三五	二	二	二	五	八	二七	四五	七四	五五	一七	一二	一三三	一四二	三〇	二	二	五	二〇	三二	三六	二四	六〇	二六	九	二	一〇七	一八三	一九〇	六	一	五	七	一〇	二四	四〇	六〇	二六	九	二	
合計	七〇	三	三	三	九	一二	四四	九〇	一二〇	一〇〇	二六	一七	二二六	二五五	六五	二	二	五	二〇	三六	四〇	六〇	五二	一八	二	一〇七	一八三	一九〇	七五七	一〇〇〇											

第二十表 細菌検査成績表 自昭和八年 至昭和十二年

種別	年別						總計	菌發見率%
	昭和八年	九年	十年	十一年	十二年	總計		
赤痢	八七四	二、五四八	二、〇七三	一、三三二	二、四八〇	九、〇九七	〇・五	
疫痢	八三三	九一九	七四七	六三三	八三三	三、九四七	〇・二	
腸チフス	一〇、〇九六	一六、〇九〇	一六、四四〇	一七、〇九六	二、九五四	五、二九五	二・七	
バラチフス	二四八	三三〇	二五三	一八九	五五	一、〇〇六	〇・五	
デフテリア	一五二	一五二	一四七	一九七	三三	八九二	二・七	
コレラ	一	一	一	一	一	五	〇・五	
ヱイダール反應	二九	三三	一八五	二四	三〇	八〇	二・七	
膽汁	九六	三〇	九四	一三	三〇	二六八	三・七	
流行性腸骨髄膜炎	一	一	一	一	一	五	〇・五	
總計	三、〇一四	二、三五八	一九九〇	二、〇五四	一六、〇五四	八、八八六	二・四	

備考 アラビア數字は菌發見數を示す

昭和十三年十月末現在に於ける腸「チフス」保菌者は腸「チフス」二九名「バラチフス」三名にして各市郡に散在し之を排菌持續月數より觀れば腸「チフス」保菌者に於ては一ヶ月以内一三名、二ヶ月以上一ヶ月未満一九名、一ヶ月以上二ヶ月未満三名二ヶ月以上三名にして「バラチフス」に於ては四ヶ月一名、六ヶ月二名なり。

二、腸「チフス」豫防注射及内服ワクチン

豫防注射は昭和十二年以前に於ては北里研究所製造感作ワクチン、傳染病研究所製造、加熱ワクチン及本縣衛生課製造、加

熱ワクチンを使用し年々各市町村に於て施行し昭和十一年以前は實施數少かりしが昭和十二年に於ては縣内菌株を以て衛生課に於て製造普及に努めたる結果利用者増加し、昭和十三年に於ては本縣菌株を以て北里研究所に製造を委託し感作ワクチンとし一c.c中菌量〇・五疋二回注射法に依り大人標準量を一・五c.cとして使用せり。(次表参照)

第二十一表 腸「チフス」ワクチン注射施行成績表

郡市別	昭和十二年度		昭和十三年度		郡市人口ニ對スル施行百分率
	施行町村數	施行人員	施行町村數	施行人員	
松山市	一	九五	一	二、八五四	三・四八
今治市	一	四一、五七〇	一	四〇、九七四	七九・四〇
宇和島市	一	一、四一〇	一	一〇、〇九〇	一九・六七
八幡濱市	一	一五四	一	二、一三〇	六・九八
新居濱市	一	二一、九二三	一	七、五〇〇	三三・七三
温泉郡	一九	二二、九二三	二二	二八、〇九五	一九・三六
越智郡	二二	三三、七八五	二六	三一、九一八	二七・六七
周桑郡	四	四、九一五	九	一一、三三四	二二・六三
新居郡	九	一三、九一一	一二	二一、二四六	二七・一八
宇摩郡	七	一八、〇九九	一八	一九、〇四〇	二六・〇一
伊豫郡	四	四、八七〇	一一	七、七四九	一一・九一
上浮穴郡	六	四、一三五	九	四、七一一	一一・六八

郡	喜多郡	西宇和郡	東宇和郡	北宇和郡	南宇和郡	合計
患者	四	四	九	一八	八	一一三
死者	三、九一八	六、九三〇	一五、四四〇	二九、九〇一	二八、二三〇	二二九、一五二
百分率	四・四九	九・八五	二六・一一	三一・五四	七七・五九	一九・六七
男患者	二七	一〇	一四	二三	七	一八八
女患者	六一、七四三	八、三〇〇	一五、〇五〇	一一、九九〇	一九、七四〇	三〇九、九六四
男死者	七〇・八五	一一・八〇	二五・四六	二三・一九	五四・二六	二六・六〇

備考 昭和十二年度新居濱市施行数は新居郡に併記す

第三節 地方病

本縣に於ける地方病としては流行性腦炎及「ウィル」氏病あり。

一、流行性腦炎

大正十三年九月以來本病に對し流行性腦脊髄膜炎疑似症として法律適用し居たりしも、昭和八年適用を廢止し縣下郡市醫師會員に同病發生報告方依頼せるが其報告狀況次表の如し。

第二十二表 最近十ヶ年間流行性腦炎患死者數

年別	患者		死者		百分率
	男	女	男	女	
昭和三年	1	1	1	1	

年別	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年	計
患者	一二九	四三	四	六六	三八	二	五八	一〇	一三一	四八一
死者	八一	三三	四	四二	二六	一	四四	七	七九	三二七
百分率	六二・七九	七六・七四	一〇〇・〇〇	六三・六四	六八・四二	五〇・〇〇	七五・八二	七〇・〇〇	六〇・三一	六五・九〇
男患者	六七	二二	一	三六	二六	一	三七	七	七八	二七五
女患者	六二	一一	三	三〇	一一	一	一一	三	五三	二〇六
男死者	三九	一四	一	二四	一七	一	二八	四	四四	一七二
女死者	四二	一九	三	一八	九	一	一六	三	三五	一四五

第二十三表 最近十ヶ年間流行性腦炎月別患死者數

年別	患者				死者			
	一月	二月	三月	四月	一月	二月	三月	四月
昭和三年								
昭和四年								
昭和五年								
昭和六年								
昭和七年								
昭和八年								
昭和九年								
昭和十年								
昭和十一年								
昭和十二年								
計								

計	十	十	十	九	八	七	六	五
	二	一						
	月	月	月	月	月	月	月	月
一								
二								
三								
四								
五								
六								
七								
八								
九								
十								
計								

第二十四表 最近十ヶ年間流行性腦炎年齢別患死數

年齢別	患死者	死者	患者對死者百分率
一才—五才	九	四	四四・四四
六—一〇	二一	六	二八・五七
一一—一五	一五	七	四六・六七
一六—二〇	二〇	二	六〇・〇〇
二一—二五	一四	八	五七・一四

二六—三〇	一五	六	四〇・〇〇
三一—三五	一九	一〇	五二・六三
三六—四〇	二二	一六	六九・五七
四一—四五	三三	二二	七一・八八
四六—五〇	二二	一八	八一・八二
五一—五五	四七	三三	六八・〇九
五六—六〇	五七	四〇	七〇・一八
六一—六五	五九	三四	五七・六二
六六—七〇	四三	三四	七九・〇七
七一—七五	三八	三一	八一・三二
七六—八〇	三一	二二	七四・一九
八一—八五	一三	一一	八四・六一
八六—九〇	二	二	一〇〇・〇〇
計	四八一	三二七	六五・九〇

二、「ワイル」氏病

「ワイル」氏病の本縣に於ける發生は古くより存在せしものゝ如く俗間「血黃疸」と稱し居たり。縣下各郡市醫師會に依頼し之れが診察報告數左表の如くなるも實數は本表以上にあるべく年々報告増加の傾向にあり。而して之が豫防として石灰窒素の施肥、鼠の驅除、ワクチン使用等に就き奨励す。

宇和島市	八幡濱市	温泉郡	越智郡	新居郡	周桑郡	宇摩郡	伊豫郡	上浮穴郡	西宇和郡	北宇和郡	南宇和郡	計
三	三	一	一	一	一	一	一	一	三	一	一	一〇
二	二	一	五	一	一	一	一	一	一	一	一	二七
四	四	一	一	一	一	一	一	一	三	一	一	九
二	二	一	一	一	一	一	一	一	三	一	一	八
一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	七
三	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一五
一〇	一〇	一	一	二	四	二	二	一	一	一	一	四一
一三	一三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六五
三七	三七	四	一	一	一	一	一	一	一	二	二	一八二

第四節 種痘

一、第一期種痘

昭和十二年中施行したる第一期種痘人員は三六、五四九人にして内善感三三、九七六人、種痘人員百に對する善感率は九二・九六にして前年の九二・七九に比し稍良好なり。

二、第二期種痘

第二期種痘人員は三八、八三三人中善感人員は一八、一五九人にして善感率は四六・七六に該り前年の四七・五〇に比し稍低下を示せり。

三、臨時種痘

昭和八年より五ヶ年間の臨時種痘人員は左の如し

昭和八年	一三八、〇九〇人
昭和九年	二八六、五〇六人
昭和十年	一、三四四人
昭和十一年	一
昭和十二年	二五八人

第一期種痘成績表

昭和十二年

郡	第一回			第二回			種痘人員百に對する善感率
	公種痘人員	私種痘人員	未種痘人員	公種痘人員	私種痘人員	未種痘人員	
温泉郡	四、六九二	三	一、七九	一、九	一	九、四八二	九四・七
越智郡	三、〇六八	一〇五	一、三三	三	一	四、四〇二	九四・〇
周桑郡	一、九九	七	四九	二	一	二、〇〇	九六・〇
新居郡	一、九六	一三	四四	三	一	二、四〇	八七・〇
計	一〇、七一五	一二五	三、二五	八	三	一四、〇九二	

年	市	郡	第一回		第二回		種痘人員 百二 善感率
			公種痘	私種痘	公種痘	私種痘	
昭和十一年	宇摩郡	宇浮穴郡	二,一六六	七	六,四〇〇	一	九三・〇七
"	伊豫郡	二,〇七四	四	二,一三六	一六	一	九四・九〇
"	喜多郡	二,〇三三	四	二,〇三三	三	一	九四・九〇
"	西宇和郡	二,〇〇四	六	二,〇〇四	三	一	九四・八四
"	東宇和郡	一,五〇六	三	一,五〇六	三	一	八六・一五
"	北宇和郡	二,三三三	三	二,三三三	三	一	九〇・三九
"	南宇和郡	一,七〇〇	四	一,七〇〇	三	一	九三・〇〇
"	松山市	一,九一九	三	一,九一九	三	一	九〇・三九
"	今治市	一,一四四	一	一,一四四	三	一	九〇・三九
"	宇和島市	一,三二六	五	一,三二六	三	一	九〇・三九
"	八幡濱市	七〇二	一	七〇二	三	一	九〇・三九
"	新居濱市	八〇六	九	八〇六	三	一	九〇・三九
計		三,六三三	一,〇〇六	一,四七三	八,〇五五	三	九〇・三九
昭和十一年		三,二七六	九三三	一,三三三	五,〇〇一	三	九〇・三九
"		三,一九五	一,一四七	一,四九三	四,九一一	三	九〇・三九
"		三,二六四	一,四七三	一,七九三	四,九〇〇	三	九〇・三九
"		三,六五五	一,五〇〇	一,四七三	五,九一九	三	九〇・三九

第二期種痘成績表

昭和十二年

年	市	郡	第一回		第二回		種痘人員 百二 善感率
			公種痘	私種痘	公種痘	私種痘	
昭和十二年	溫泉郡	一,四六五	二,七四四	三	一,四六五	二	三三・〇五
"	越智郡	二,四七三	七九	一,二七	四七	二	六〇・三三
"	周桑郡	九九八	三七五	五	三三	一	六〇・二五
"	新居郡	一,〇九〇	一,〇三三	三	五三	一	四〇・七〇
"	宇摩郡	九四〇	八五〇	三	五七	一	三九・六九
"	上浮穴郡	八三三	四四	二	一八	一	五七・四六
"	伊豫郡	六二〇	一,三〇〇	四	四二	一	二七・八九
"	喜多郡	一,四〇六	六四	一	五九	一	五七・四四
"	西宇和郡	一,〇三三	七五	一	八	一	五〇・六〇
"	東宇和郡	七〇〇	七九	一	三	一	三九・六四
"	北宇和郡	一,四三三	一,〇二〇	二	四三	一	五〇・三三
"	南宇和郡	一,四三三	四九	一	三六	一	四九・七七
"	松山市	一,三三四	一,一八七	一	四九	一	四〇・七〇
"	今治市	八二六	一,一八二	一	二〇	一	六九・二六